

## 法政大学 第2回新任教員FDセミナー

## 私の授業の工夫

2013年7月13日(土) 13:00～15:45

法政大学 市ヶ谷キャンパス 外濠校舎4階 S407教室

## ◇話題提供

「eポートフォリオHOPSによる  
シラバスと授業支援環境の統合  
—外国語科目、講義科目、演習科目を例に—」

**鈴木 靖**

(法政大学 国際文化学部教授)

「大人数授業での工夫—経済学部を例として—」

**廣川 みどり**

(法政大学 経済学部教授)

「授業の改善—集中度を上げ飽きさせない授業—」

**村野 健太郎**

(法政大学 生命科学部教授)

「現在の法政大学生に関する数値データについて  
—留級者数、退学・除籍者数にみる特徴を中心として—」

**伊藤 学**

(法政大学 学務部教学企画課)

## 開会の挨拶

**浜村 彰**

(法政大学 教育支援本部担当常務理事)

本日は週末のお暑い中、新任教員FDセミナーにご出席くださりましてありがとうございます。実は今、大学基準協会の認証評価の作業をしていまして、関西の大きい大学のものを見ているのですが、その基準項目の中で、教育の方法という項目があります。その基盤評価の中で、「FDにどのくらい取り組んでいるか。特に授業改善について研修をやっているか」という項目があります。その大学では年に一回、大学全体で新任教員を対象にしたセミナーをやっています。うちと同じような形をやっているのですが、それを審査したある副主査の一人が「全体でやっているのはいいけれども、たった年一回か」と。「あるいは各学部、研究科ごとの授業改善についての研修をしていないのか」という

ような質問を書いています。だんだん基準協会のFDに関する審査の目が厳しくなっているという印象があります。

本学の場合は、4月の初めに新任教員を対象にした従来の研修と、本日の「教育方法の改善について」の研修、2回を行います。将来的には学部研究科ごとのFD委員会で、教員相互のグループワーク等の授業改善についての研修会のようなものを開くことが、ひょっとしたら求められてくるかもしれないという気がしています。

私が学生の時には、黒板にその授業の内容を書いていて、プリントを配る先生は殆どいなかった。私が教員になってからは、さすがにみなさんレジュメを作って、毎回毎回、大教室の授業でもプリントを配る先生が増えてきましたし、最近では、パワーポイントを使って授業をやっている先生が増えています。そういう意味でも、授業の形態なり形式がかなり変わってきていますし、学生目線に立った授業を進める先生も増えてきていると思います。

それぞれの先生が持っている、授業あるいは教育のノウハウは非常に貴重な財産です。それをどうか独り占めしないで、お互いにそれぞれが持っている教育の工夫とか、新たな試みのようなものを、こういう形で発表する機会を増やしていきたいと思います。よりよい授業の改善に向けた相互の研鑽の場、あるいは相互に情報交換しあう場を設けることが大学全体の教育の質保証に非常に大きなプラスになると思います。先生方お一人おひとりが持っている教育についてのノウハウなり、テクニックが大学全体

の共通の財産になるよう、心から強く望んでいます。

本日、半日長いですが、どうかよろしくお願いいたします。

## 司会

浜村理事、どうもありがとうございました。

では、これから、各キャンパスから1名ずつの話題提供をしていただきます。昨今、いろいろな授業方法が出ています。少人数、大人数、それからポートフォリオ等、今日は是非、そのあたりのところを参考にいただければと思います。

本日、まず市ヶ谷キャンパスの方から話題提供1として、法政大学国際文化学部教授の鈴木先生、それから、話題提供2として多摩キャンパスから法政大学経済学部教授の廣川先生、話題提供3として、小金井キャンパス法政大学生命科学部教授の村野先生にお願いしています。もう一つ、新任の教員の先生方、なかなか法政大学に関する数値データというのを見たことがないと思います。今日、4つ目として、法政大学学務部教学企画課学務企画担当の伊藤さんの方から留級者数、退学・除籍者数にみる特徴を説明してもらう予定です。

本セミナーは、決して難しいものではございません。新任の先生方、皆様方にいろいろな事例を知っていただくというのが目的です。是非、今日一日楽しんでいただければと思います。

では、さっそく話題提供1に入りたいと思います。「eポートフォリオHOPSによるシラバスと授業支援環境の統合」と題しまして、副題として「外国語科目、講義科目、演習科目を例に」ということで、鈴木先生にお願いしたいと思います。では、鈴木先生、ご準備の方、よろしくお願いいたします。

## 話題提供

### 「eポートフォリオHOPSによるシラバスと授業支援環境の統合 —外国語科目、講義科目、演習科目を例に—」

鈴木 靖

(法政大学 国際文化学部教授)

国際文化学部の鈴木と申します。よろしくお願いいたします。お手元にA4版の裏表の「eポートフォリオHOPSによるシラバスと授業支援環境の統合」というプリントがありますでしょうか。もし必要であれば、ipadも用意していますのでご利用いただければと思います。

今日は、この「eポートフォリオHOPSによるシラバスと授業支援環境の統合」と題しまして、外国語科目での取り組み、講義科目での取り組み、それから演習科目での取り組み、その3つについてご報告させていただきます。

## eポートフォリオの特徴

「eポートフォリオ」というのを初めてお聞きになった方はいらっしゃるでしょうか。eポートフォリオといいますのは、簡単に言ってしまうと、FacebookのようなSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）と学生が自らの学習成果物を蓄積・公開・共有できるストレージ（データ貯蔵庫）、それらを組み合わせたと考えていただければいいと思います。

大学で授業支援システムというのがあります。が、授業支援システムというのはあくまでも、教員主体です。毎年度授業ごとに枠を設けられ、その中で必要なものを提供するという、授業単位のものです。ですから、年度が変わるとすべてクリアされてしまいます。

それに対して、このeポートフォリオというのは、学生主体の学習支援システムです。学生が自らの成果物を蓄え、整理し、発表することで、学生間の相互学習を支援する。そういうときに使うものとお考えください。

## 導入の経緯

まず、なぜこのeポートフォリオを導入したのかというところから、ご説明したいと思います。国際文化学部は、必修の留学制度を持っており、原則としてすべての学生は2年生の後期（短期の場合は夏休み）になりますと、世界の7言語圏、10か国、16大学のいずれかに留学することになります。

この制度は「国際社会人」の育成を教育目標に掲げる本学部にとって、一定の成果をあげているのではないかと思います。たとえば、近年、日本国内では在日外国人に対する心無い言葉、ヘイトスピーチが問題になっていますが、本学部の学生はみな世界各地へ行って外国語を勉強しているので、たとえば、在日外国人の子女がいて、その外国語を話せると、「ああ、いいな。〇〇語が話せて」というような声をしばしば耳にします。そんな雰囲気が醸成されているのです。

しかし、この制度にも2つの課題がありました。まず一つは、留学への不安をいかに解消するかという課題です。必修プログラムなので全員が参加しなければならないのですが、なかには留学の直前になって、体調不良を訴えたり、留学先で問題行動を起こす学生も出てきました。その原因は、留学先の情報不足による不安、これが高じてくると安全な留学制度を維持していくことが難しくなります。これが第一の課題でした。

もう一つは、留学中いかにモチベーションを維持するか。この留学制度が十年以上にわたって行われ、先輩たちから留学先の情報を得られるようになると、留学への緊張感がなくなり、なかには明確な目的意識を持たないまま留学する学生も出てきました。

こうした中、2010年、当時学部長であった曾士才先生から、留学先の情報不足による不安を解消し、留学中のモチベーションを維持するために何かよい解決方法はないかとの問い合

わせを受けました。ちょうどその頃、私はプロジェクト・リーダーの一人としてFD推進センターの活動に参加しておりましたので、eポートフォリオについても学ぶ機会があり、これを学部で導入してはどうかと提案しました。

しかし、予算の裏づけがなかったために、当初は自分でレンタル・サーバーを借りて、ゼミ生とともに試験的な運用を始めてみることにしました。

手弁当によるスタートでしたが、それが逆によかったのではないかと思います。世界中からいろいろなオープンソースのシステムを集め、それらの長所・短所をゼミ生と議論しながら、学部にとって何が必要なのかを考えることができました。

こうした試行期間を経て、2011年度からは、情報メディア教育研究センターと共同で、オープンソースのmaharaというeポートフォリオを本格的に稼働させることにしました。

さらに昨年度からは、本学が平成24年度文部科学省グローバル人材育成推進事業（タイプB特色型）に採択されたのを受け、このeポートフォリオをHOPSの名で全学展開することになりました。ですから、現在ではどの学部でもこのシステムが利用できるようになっています。

## eポートフォリオの授業での利用法

それでは、このeポートフォリオを授業の中でどのように活用しているか。それを外国語科目、講義科目、演習科目の3つ点からご紹介していきましょう。

お手元にipadのある方は、「法政大学中国語研究室」というアイコンをクリックしてください。こんな画面が出るはずですよ。これがeポートフォリオ上に作成した中国語学習のためのポータルサイトです。

### (1) 外国語科目

現在、本学では国際文化学部と経済学部が中国語教育にこのeポートフォリオを活用してい

ます。本日の報告のテーマは「シラバスと授業支援環境の統合」ですが、eポートフォリオが便利なのは、授業支援システムと違いまして、教員もまた自分にあった授業支援環境をデザインできることです。

例えば、SA中国（二年度後期に中国に留学するクラス）の担当教員であれば、学生が4年間に履修すべき関連科目の年次配当表や各学期の時間割を、eポートフォリオ上に作成することができます。これは、今年の春学期の時間割ですが、科目名をクリックするとシラバスが表示されます。

シラバスの授業計画は、デジタル教科書とリンクしています。例えば「5月7日」のところをクリックしますと、第9課のところが出てきます。デジタル教科書には音声を組み込んでありますので、学生はCDなどを使わなくても教科書の発音を聞くことができます。

また、各課の終わりのところには宿題のページがついていて、別途設置したeラーニングへの入口になっています。ここには①単語の聞き取り、②単語の中国語訳、③短文の聞き取り、④短文の中国語訳という4つの宿題が用意されています。

宿題の実施状況は、サーバー上に記録されるため、教員はインターネットを通じて学生の学習状況を遠隔管理することができます。万一、宿題をやっていない学生がいた場合には、学習管理画面からその学生に携帯メールを送ることができます。デジタル教科書は、最初に利用する際に携帯メールアドレスの登録を要求します。ですから、教員がいちいち登録しなくても、自動的に携帯メールの連絡網ができるのです。

自宅学習の成果を確認するために、毎回授業の始めにeラーニングによるテストも行っています。eラーニングは、一人一人異なった問題を出題するので、カンニングはできません。また、一部の翻訳問題以外はeラーニングが自動採点してくれるので、毎回行っているわりには教員の負担はさほど大きくありません。このテ

ストは100点満点中、宿題の実施状況が20点を占めるので、自然と（嫌でも）自宅学習の習慣が身につくようになります。

中級の授業では、予習課題としてビデオのディクテーションを行っています。これには私の研究室が開発した映像翻訳実習システムを利用しています。デジタル教科書と同じく、eポートフォリオへの組み込みが容易なので、外国語の教育番組やドラマ、映画などを教材として手軽に利用することができます。

この授業の宿題は、ビデオの内容を字幕に入力してくること。答えがあっているかどうかは「正誤判定」ボタンを押すと確認することができます。正解の場合はピンポンという音がなり、不正解の場合はどこが間違っているかが表示されます。留学先では予習が大切なのですが、こうした教材を使うことにより、日頃から予習する習慣を身につけさせるようにしています。

教室では教室でしかできないことを学び、自宅でできることは自宅学習の課題とする。eポートフォリオによって、授業とeラーニングとのブレンド型学習を実現しています。

## (2) 講義科目

次に講義科目です。先ほどの時間割の中から「中国の文化Ⅸ」をクリックしますと、この授業のシラバスが表示されます。この授業では、毎回eポートフォリオを通じて事前学習の資料を配布することにより、講義への理解と関心を高めるようにしています。

たとえば、授業計画の中の「4月18日」を見てみますと、この日のテーマは「漢字の誕生」となります。普段当たり前のように使っている漢字ですが、それが東アジアで果たした役割を学生に理解してもらうのはなかなか容易ではありません。そこで、明末に中国を訪れたマテオ・リッチという宣教師が、中国から本国に送った報告書を事前学習の資料としてアップしています。マテオ・リッチは、その優れた語学力と科学知識によって、フランシスコ・ザビエルが果

たせなかった中国国内での布教を実現した人物ですが、その彼が漢字をどのように評価していたかがわかる面白い文章です。こうした予備知識があると授業へのモチベーションも高まるのです。

ちなみにHOPSはスマートフォンにも対応しているので、学生の中には通学の途中でこの資料を読んでいる者もいるようです。

授業では板書は行わず、文字のほか、写真やビデオなどをパワーポイントを使ってシームレスに提示するようにしています。ただ、これではノートを取るのが難しいため、授業後はスライドをeポートフォリオにアップしています。

また、eポートフォリオとは直接関係ありませんが、授業では毎回、事前学習と授業内容の双方を踏まえてリアクション・シートにコメントを書くよう指導しています。リアクション・シートは出席カードも兼ねているので、一列ごとに人数を確認し、過不足なく配布するようにしています。これにより事前学習と出席管理の厳格化を図っているのです。

### (3) 演習科目

三つ目は、演習科目です。演習では、文字資料のほか、写真、映像などさまざまな資料が集まります。eポートフォリオは、こうしたさまざまな情報を一元的に管理し、共有するのに便利です。

eポートフォリオには、文字や写真、映像などをレイアウトし、一つのページを作成する機能があります。たとえば、授業計画の中の「6月13日」のページを開いてみると、この日に学んだ渡嘉敷村の「集団自決」に関する資料が一覧できます。当時、米軍の従軍記者が書いた新聞記事や生存者の証言などの文字資料、渡嘉敷村の戦跡図や関係者の写真資料、生存者の証言を記録した映像資料など。これらを一元的に管理し、共有できるというのは、eポートフォリオならではの機能でしょう。

eポートフォリオを使って、演習のシラバス

の中に記録と資料を蓄積していくことにより、教員とゼミ生がともに学習の目的と情報を共有していくことが可能になっています。

### 今後の課題

最後にeポートフォリオの課題について述べたいと思います。

一つ目は、eポートフォリオ本来の利用方法を学生の間に浸透させることです。eポートフォリオはあくまでも学生主体の学習支援システムですから、学生自身が目標を設定し、その成果を蓄積・公開・共有していくことが必要です。そうすることで、大学での4年間でより計画的かつ有意義に過ごすことができるのではないのでしょうか。

二つ目が、「eラーニングのコンテンツや事前学習資料の共有化」です。教員同士がeポートフォリオ上に授業関係の資料を公開し、情報を共有することにより、教育の体系化と高度化を実現できるのではないかと考えます。

以上の内容については、昨年10月27日に開催された情報メディア教育研究センターシンポジウムでも「留学を実りあるものにするための3つのICT活用」というテーマで報告いたしました。同センターのホームページに小稿がアップされていますので、そちらも併せてご参照いただければと思います。

ご清聴、ありがとうございました。

### 司会

鈴木先生、ありがとうございました。本日、eポートフォリオを活用した外国語科目、講義科目、演習科目等の利用法、SAプログラムの課題、それからシラバスの説明、語学の活用で宿題の活用というところ。それから達成度の確認、自宅学習への誘い、このあたりは重要なポイントだと思います。また、シラバスの中への資料封入、お話の中であった出席管理の厳格化の重要性等々、お話をいただきました。どうも

ありがとうございました。

続きまして、二つ目の話題提供に移りたいと思います。「大人数授業での工夫」と題しまして、経済学部を例として、法政大学経済学部教授でいらっしゃいます廣川みどり先生、よろしくお願いいたします。

#### 話題提供

#### 「大人数授業での工夫 —経済学部を例として—

廣川 みどり

(法政大学 経済学部教授)

#### はじめに

ご紹介に与りました経済学教員の廣川みどりと申します。よろしくお願いいたします。

本日は新任研修ということですが、新任と言っても、多くの方はたぶん他の大学で既に講義をされているのではと思います。というのも、法政大学ともなると、ある程度の教育の経験というものが応募をするときに要求されていて、その上で教えるということになるのではと思うからです。とはいえ、この規模での大きな人数の授業を持つということは、なかなかない経験だったのではないかと思います。

それで、今回、「大人数授業での工夫」ということで、お話させていただきます。なお、副題についてですが、このシンポジウムのタイトルが「私の授業の工夫」となっているものの、若干自分に不安があるので、他の方のことも参考にさせていただきたいと思って、“経済学部を例として”ということを入れさせていただきました。経済学部には、非常に多くの学生がいます。一学年800人ぐらい、もうちょっといまして、4学年ともなると、3000人以上の人がやってくるのです。2年生以上の授業になると、そのうち何人がやってくるのかということがなかなか読めません。それで、500、600名という授業を抱えざるを得ないということになります。そうした状況で得られた経験、人の授業を

見ての感想もふまえてということで、副題をつけました。ということで、自分では必ずしもできてはいないけれども、私も頑張りたいという気持ちを込めて、本日はお話をさせていただきます。

#### 大人数授業

新学期、一回目に授業に出た時に、「あ、大人数の授業になってしまった」とショックを受ける人は少なくないと思います。受けない人もいるかもしれませんが、私は最初かなりショックでした。「どうしてこんなに人が来ているの？」というのが一つですが、もう一つは意外に大きな教室に人が来ていないということもショックだったりします。と同時に、受講生が少ないのに、履修名簿を見てみると、「こんなにいる！」ということがあったりします。そういうマス授業がいくつもあるのですが、かたや、FDにおけるお話では、よく、“少人数の授業はいいことである。細やかな対応が可能である。そして「教育として効果が大きい」とされている”にもかかわらず、私たちは大人数授業を持ってしまったというか、ふってきてしまうのです。

確かに、個別の授業、個別の対応ができるからそれでいいのですが、現状、なんとかそれを乗り切らなければいけない。というと、私が大人数の授業が嫌いなように思われるかもしれませんが、しかし、私、大人数の授業、実は大好きなのです。というのは、結構メリットがあります。なので、それは使い方次第なのではないかと思うわけです。

まず、大人数の授業は、うまくいけば楽しい。もちろん、少人数でもうまくいけば楽しいのですが、大人数は結構たくさんいるから楽しさは広がります。ただし、楽しくなるためには、ばらつきの大きさに配慮しないといけないということです。これはまたあとで詳しくやります。

ところで、大人数といえば大教室です。この教室も大教室っぽく見えますが、もっと信じ

られないような大教室があります。そういう場合、大教室の中で何をするかというと、基本的には距離感を縮めなければならないというのが大事なことではないかと思います。その他あれこれも含め、“大人数はうまくいけば楽しい、楽しくしたい”というお話をします。

## 大人数は（うまくいけば）楽しい

少人数は効果がある、少人数はいいと、いろいろ言われていますが、少人数の授業に出ていて学生が生き生きしているかという、必ずしもそうではありません。逆に、大人数でも楽しいということもあります。たくさんの人が出ていて楽しい場というのを想定してみてください。たとえば、有名なロック歌手のコンサートとか、人気の劇場には観客がたくさんいます。その人たちが楽しくないかという、すごく楽しそうです。すごく満足して帰っていくのです。“じゃあ、それは一体何なのか”ということを知りたいと思います。

まず、学生の立場を考えてみます。そうすると“一緒に出ているんだよ”ということで、お互いに体験を共有できます。“あ、あの人も出ている。この人も出ている”ということで、お互いに“ああ、わかった”。“こうだよ”とか、先生が喋って、“ああ、そうだったよね”というのが、少人数ではなかったようなことが増幅されるのです。ということで、共有感、増幅感がメリットの一つといえます。

それから、学生の立場からのもう一つのメリットは匿名性です。少人数の授業では、匿名性がなく、一人ひとりの顔が明らかに見えます。“あいつ、なんかわかってないじゃん”みたいに、わかってしまいます。毎回授業に出ていて、例えば英語に出ていて、“あ、また彼にあたる”で、“彼は英語がよくできるから、すごくよくしゃべるよね。あいつはなんかイマイチだよ”。毎回あてられて、“また私のところにあたってしまった。答えられない”なんていうのが暗い気持ちになるのです。

ところが大人数の時には、そっと出ることができます。経済学部では、1年生の授業科目に入門ゼミというのがあるのですが、入門ゼミに出てこなくなった学生に聞いたところ、数名の人は、ゼミという小さな場所での授業が濃密過ぎていやだと答えていました。とりわけ1年生授業で、3回か4回出てこなくなったら、ほかの人はみんな友だち作ってしまった。みんなが友だちを作って、自分だけ浮いているわけです。なので、この授業はもういいや、来年、1年生の授業を出直してやればいいやという気持ちになったりします。ところが大人数であれば、その中に埋もれて、そっと聞くことができるわけです。それは意外に悪いことではないというふうに思います。

さて、教員の立場からのメリットですが、当然お客さんがたくさんいるのは嬉しいです。閑散としたところでお店を開くよりは、たくさんの人に聞いてもらえると教員魂がワクワクするわけです。それから学生相互に少し刺激を与えてあげる。学生が他の学生の発言を聴いて、“こんなことまでできるやつがいるんだ”“ちょっと僕も頑張ってみようかな”という気持ちになるといいなというわけです。ここまで喋ると「こういうことができる先生ならいいでしょうが、わたしにはちょっと…」というふうに思われる方がいるかもしれません。確かに、ミック・ジャガーが歌をうたえば、多くの人が喜ぶし、すごく上手な人が喋れば聞いてくれます。しかし、それは達人技の域でしょうから、ここでは、達人がやることではなくて、誰にでもできそうなことというのをお話したいと思います。

## ばらつき大きさに配慮すること

まず、第一に「ばらつきに配慮」してください。多くの人がいるということは、すごくできる人もいれば、全然わかっていない人もいます。とりわけ経済学部、結構数学というのが大事なのに、数学受験で入ってきた人と数学やっていない人というのがいます。ということで、ばらつきの

大きさは非常に大きいです。どれくらい大きいかというと、片や、分数がわからない、一次曲線が引けない学生がいます。「傾きってなに？」とか、切片が何かわからない、そういう学生です。ところが片や、微分とかバシバシ使える学生もいます。

また、理解度とか板書のスピードとか、授業への熱意の違いもあります。先生のファンとか、すぐできる学生が少しはいるのですが、そうではない学生もたくさんいるし、板書もなんだかタラタラと書く学生と、あっという間に書いてしまう学生もいるのです。それから、結構適当に出席しているのにすぐに理解できてしまう学生もいれば、毎回出ているのに全然わからないという学生もいるわけです。

では、どうしたらいいかというと、ある程度進め方に「ゆとり」をもつことが大事になってきます。板書を書いたら、板書をさせる時間をかなりゆっくり取っていただきたいと思っています。

昔、私は松坂和夫先生の数学の授業を受けて非常に感銘を受けたことがあります。その先生は、初めに一通り説明をします。「これは、こういうような考え方で、こういうふうにするのですよ。解くのですよ」というお話をまず行います。みんなはその時間は板書をしなくてもいいのです。書かない時間というのを作ります。そしてそのあとに、「じゃあ、これで一通り理解したら、今、理解したことをまとめましょう」と言って、おもむろに書き始めます。おもむろに書き始めて、みんなが書くのを見ているのです。「今、どれくらい書いているかな」というふうに見ています。

早く書ける子は、早く書けますが、ゆっくりでないと書けないという子がいるから、ある程度書けているなというところをみる、その時間をゆっくり、ゆとりをもつということが大事だと思います。

それから、当然、できる学生とできない学生がいます。例えば、さっきの少数の問題もそう

ですし、それから一次曲線引くときに、ここが切片ですよねという話をする、できる学生にとっては退屈です。ところができない学生は、説明してもらってようやくついてくるというわけです。その時に、できる学生からすると“わざわざなんであんなこと説明しているのだろう”と、思うのです。なので、教師から「こういうこともわからない人がいたりするんだよね」ということを示して進めるということが大事になってきます。他の人がどれくらいわかっているのかということ共有し、進め方に了解してもらおうということが大事になると思います。

では、どのように共有するかです。インタラクティブに進めていくというのは一つの手です。どんどん当てていって、「これどうですか」と聞いていく。あるいは計算してもらって、「では、今解いてください」と言って、それぞれのノートに解いてあるのを回って見る。「あ、ここまで解けていますね。ここは解けていませんね。では、できている人がかなりいるようなので、さきに進めましょう」という話でもっていくということを、私はよくやっています。一人ひとりに聞いてもいいですが、時折傷つく子があります。こんなこともわからないということで。なので、間をちょっともって、「ここまでは大丈夫ですか？」というふうに聞くというのは有りだと思います。

もう一つは、「こっちがいいですか。あっちがいいですか」。「答えはAですか、Bですか？手を挙げてください」と言って、手を挙げてもらいます。これも大教室ならではのことで、多少自分が手を挙げて大教室の中で埋もれた一つの手ですから、匿名的になり、具体的に“アイツわかってないな”というのは少ないと思います。と同時に、「わからなければ挙げなくてもいいよ」というのも有りだとします。それで、納得してもらおうということです。よくこういうことを言うと、クリッカーというものを使って、教壇に表示すればいいという話があるので



すが、あまり技術に頼ると、実はクリッカーをやっている間、退屈すぎたりするのです。こういったところは、ローテクの利用も提唱したいと思います。

## 私語や「内職」のコントロール

さて、よくあるのが私語や内職です。私も教授会の時にうっかりしてしまい、顰蹙を買っていますので、控えたいところですし、コントロールしたいです。全部に注意していると進まないのです。私は、「他の学生に迷惑をかけない」ということを大前提にしています。喋っていて、私の声が聞こえないとか、あるいは、ある人が喋ったために、喋られた人が理解できなくなる、それはやめましょうといった具合です。

実をいうと、私は私語は悪くないというか、授業に関係のある私語というのは大事だと思います。授業に取り組んでいる学生としては「先生、あんなこと言っているけど、これ、どうだったっけ」と、友だちと喋りたいということはあるでしょう。他にも、「あそこ、見えないね」とか、「あれ？ここからここって、どうだったんだっけ」というようなところが必ず出てきます。そういう発言を禁止するのではなく、「そこはこうだよ」と拾うことが大切で、そのために私語をする時間というのをとってもいいと思います。私の場合は、「私が喋っている時は喋らないように」といいます。私が喋ってないときは、喋っていいんだよということです。そうすると、ノート取りながら“これどうだよ？”というような感じで、学生が相談したり、考える時間を確保できます。そして、こちらが伝えるときには「では、これから私が喋るから、今、喋るのはやめてください」というふうなかたちで、きちんと受け取ってもらおうということです。

## 授業に出てくる学生、出てこない学生

これも悩ましいのですが、授業に出てくる学生、出てこない学生がいます。500人くらいの

授業だと、3分の1くらい出てきて、あとはみんなノートのコピーを取る。コピーを取られる側の学生さんにすれば、いい迷惑です。ただ、出席を強要するのでは、いい雰囲気になりません。“授業に出てきたらお得です”という感をとりあえず作りましょう。ノートだけでは伝わらないものがあなたにはありますということです。それは何かというと、“自分がわからなかったら、すぐ聞けます”。“来週にわからないことを持ち越すことにはなりませんよ”。“先生はどんな細かいことでも、つまらないことでも答えてあげますよ”。たとえば“分数の計算だって、一緒にやってあげますよ”というようなことが大事だと思います。

ノートの写しだけでは伝わらない、ここにかえて、“今日はみんなこの場で理解して帰しましょう”。それを強調することが大事ではないと思います。積極的に出席させるように、インタラクティブな講義を心がける。それを強調したいということです。

## 距離感を縮めることが大切

なにぶん、大きな教室ですから距離感を縮めたいと思います。大教室の授業は、先生が遠くて小さくて、文字も小さくて退屈です。遠くから見る字と近くから見る字では、だいぶ大きさが違います。なので、とにかくこの距離感をなんとか縮めるということが大事でしょう。そのためには、まず文字を大きく書いて、そして書いたあと、必ず自分で一番後ろまで行ってください。そうすると、どれくらいの文字の大きさなのかということが実感できると思います。自分が書いたものが、こういうふうに見えているということがわかるわけです。

それから、私の大好きなローリングストーンズのミック・ジャガーですが、必ずすごい舞台作って、舞台の端から端まで走りづめです。向こうへ行ったり、あっちへ行ったりして、つまり、動きを大きくしているわけです。体力使いますが、大教室で先生が小さく見えるときに、

動作を大きくすることで、距離感を縮める。私は達人ではないので、とりあえずこういうベタなことをやりながら、“自分を大きく見せる”、あるいは“退屈にならないようにする”、“近く感じてもらう”ということが大事になってくると思います。それできちんと伝わっているかどうか。体力があれば、なるべく全部回っていただきたいです。

この間、同じ経済学部のある先生の授業をそっと横で見たのですが、彼は喋りながら、汗をかきながら、教室全体を回りながら喋って、講義のあと、へとへとになって帰られていました。とにかく、相手に伝わらせるということがすごく大事になります。

ゲームっぽい進め方もあると思います。参加者、いろいろいると思いますから、何か書いてもらって、それを他の人にコメントしてもらう。キャリアデザイン論という講義のなかでは、コメントを書いた紙をその場で全員に返すということも、やっていました。その返し方がすごく面白かったのですが、まず、机に番号を全部振ります。1-Aから1-Z、2-Aから2-Zという具合に、横方向と縦方向で位置決めします。そして、コメントが書かれた紙を、自分よりも若い番号は左に、自分よりもアルファベット若いものは前に回すという形で指示すると、なんと3分か5分くらいで、どんな大教室でもコメントを書いた紙が、どんなに散らばっても元に戻ります。自分がやったものが不思議な感じで返ってくるということで、学生は喜んでいました。ゲーム理論の実験では、少し遊びを含めたクイズ形式のものがあり、学生に「参加している」という実感を持たせるものになっています。

それから、リアクションシートも役に立ちます。たぶん次の方も話されると思うのですが、「今日の授業どうでしたか」という感想を紙に書かせて提出し、次回以降にそれを一部印刷したり、読み上げたりして反映させる、というようなことも活用してください。でも、毎回やるとたぶん、飽きます。学生もいつもいつものこ

となので、学期中に何回かというのが適当ではないかと思います。

閑散とした授業になる時があります。ちょうど6月半ばくらい。学生が出てこなくなるのです。すると、ある程度あった人々が、まず閑散とする。閑散すると同時にだいたい、前3列は座りません。この教室でも同じですが、だいたい後ろから入ってくるわけです。その時は仕方がないので、教員のみなさんも後ろに行ってください。学生に「前に出てきてください」というのもひとつの手でしょうが、そういうやり方は、教員の怠慢だと思います。自分の方から近寄るということ。それが大事なのではないかと。つまり、体力です。

## その他の工夫

出席については、先ほど鈴木先生がされたようなシステム使ってもいいですし、マークシートを使うという話もありますが、私は無理には取りません。“出てきたらお得です”という感じをとにかくつけます。出てきて喋られる、出てきて眠っているというのは意味がないということ。それで「ちゃんと授業料を払っているで、あなたたちは聞いてくださいね」ということが大事かと思います。

それから、資料の利用や、授業支援システム、さきほどのeポートフォリオ等を利用することが大事かと思います。

なお、大人数の授業に限りませんが、シラバス通りに進まなくても焦らない。とにかく、“みんながわかるということが一番大事”なので、シラバス通りに進まなくても気にしないということです。わかったところまでやります。先ほどのeポートフォリオであれば、またシラバスを書き換えることができるので、さらにいいでしょうが、シラバスは最初に作ったものなので、進まないということはあると思います。

そのほかには、学生アシスタントさんを利用するとか、試験、レポートの管理は十分に余裕を持つとか、マークシートも活用してください。

それと、地震災害の際の対処については、ちゃんと確認しておかないと、大人数だとパニックになります。責任を持って対処確認をしてください。

500人くらいいると、特殊な学生が出てきます。奇声を発したりとか、神経質になっていたりする学生がいます。心理学の先生に聞いたら、だいたい何パーセントかはいるはずということなので、大教室ではありながら、ちょっと目を配っていただければと思います。学生相談室等であらかじめ対処を確認しておくといいと思います。

そして非常に大事なことなのですが、パワーポイントに頼りすぎないこと。今、私これずっとパワーポイントでやってきました。そして最初に川上先生と浜村理事が、“昔は黒板しかなかった”という話をされましたが、実をいうと、黒板ほど素晴らしい器機はないと私は思うのです。パワーポイントは、決まったことしか伝えられません。ところが黒板であれば、その都度みんなの理解に照らし合わせて、どんどん作っていくことができます。インタラクティブにやってみましょう。例えば「政府ってなんですか。政府ってどんなことをやっていると思いますか」というと、どんどんみんな勝手なことを言います。小学生レベルでいいのです。「お役人だ」、「堅そう」とか、そんなことを言ったら、どんどん黒板に書き込んでいきましょう。このような中から、「では、何がわかるのですか」というようなことをどんどん黒板のうえで作りあげていく。つまり、ライブをちゃんとやってあげることが大事です。

それから、パワーポイントはどう考えても暗いです。これからもうちょっと技術が発展して、LEDできれいになると思いますけれども、パワーポイントやっている間は、たぶん私の顔は見えません。見えない顔の人が何か喋っているというのは、たぶん、とってもとっても退屈です。もちろんパワーポイントを否定するわけではないのですが、頼りすぎると、絶対に退屈に

なります。眠くなります。ですので、頼りすぎないというのは、すごく大事な話なのではないかと思います。そして、とにかく、「一緒に作っていきましょう」ということを大事にしたいです。

## 伝えることを大事に

ここまで述べましたが、基本的には、講義は毎回その都度の勝負です。そういう意味では、少人数授業と同じです。講義はナマモノですから、相手の反応をとにかく大事にしてください。

完璧な講義をしようとして、一生懸命準備してもだいたいそれを裏切られることが多いので、むしろそれよりは、相手がどういうことを理解しているのだろうかということを判断して、多少は口下手でもしかたがないと割りきり、「とにかく伝えましょう」ということを大事にしたいと思います。

なお、困ったときには、同僚や先輩に相談をしてください。ご清聴ありがとうございました。

## 司会

廣川先生、ありがとうございました。大人数授業での工夫ということで、距離感、それから大人数授業での教員の楽しさの気づき、ゆとりをもつ授業の進め方、ローテクの活用と私語を利用するということも重要なポイントだと思います。

クラス形式等はじめ、大人数形式だけではなくて、いろいろな授業の工夫が入っていたと思います。どうもありがとうございました。

では、次の話題提供に移りたいと思います。話題提供3として、「授業の改善—集中度を上げ飽きさせない授業—」、法政大学生命科学部教授でいらっしゃいます、村野健太郎先生です。では、よろしくお願いします。

## 話題提供

### 「授業の改善

### —集中度を上げ飽きさせない授業—

村野 健太郎

(法政大学 生命科学部教授)

## 取り入れている手法

生命科学部環境応用化学科の村野です。今日はこちらに書きましたような「集中度を上げ飽きさせない授業」というお話をさせていただきます。

こちらに、取り入れている手法をまとめました。あとで詳しく説明しますのでここではざっと流していきます。

講義は「パワーポイントプレゼンテーション」でやっています。今、パワーポイントプレゼンテーションに“頼りすぎない”という意見が出ましたが、基本、パワーポイントプレゼンテーションです。

そのかわり、このパワーポイント資料をpdfにして授業支援システムに事前にアップしています。学生はプリントアウトを持ってくるようになっていきます。ただ、その印刷が面倒臭くて、全員が持ってきているわけではありません。

三番目として、「講義記録」を作成し提出ということです。これが出席の証明にもなります。

5～6分間の「書き写し」というのを最初にやります。これは集中を早めるためです。

それから、「ビデオ映像」、「ネット映像」をたくさん取り入れています。こういうものは物理化学とか無機化学の授業ではできないと思うのですが、私は環境とか触媒、あるいは分析化学——分析化学はほとんどないのですが——、そういう科目をやってしまして、特に環境はいくらでも「ビデオ映像」、「ネット映像」がありますので、取り入れています。

こういうものがあまりない分析化学は、この演習問題というものを時々入れてやっています。

配布資料というものがあつた時には、必ず「音

読」をさせます。学生にあてて、読ませています。「ノーベル賞」に関する話をするということをしています。これらの詳細について一つずつ話していきたいと思います。

## 講義記録

お手元に、学生の講義記録のサンプルが入っていると思いますが、A4一枚の、こういう用紙です。名前など書きますが、もちろん、この部分は最初全部空欄です。授業の最初に、講義記録の最初の部分に5～6分間で書く量くらいの文章を書き写してもらいます。

次に、半ば頃でビデオを見せて、ビデオの感想文を150字以上書くように指示します。

授業の終わるときに、その日のまとめになるようなことを5～6分間書く分提示して、それを書き終わったら提出して、採点というのではないのですが、ここに確認の緑色のゴム印を押します。それも理由があるのですが、講義記録は授業に出席した人は試験の時、持ってきてもいいけれども、授業に出席していない人が、こちらが黒いコピーのまま持ってくることは許していません。完全にチェックしているわけではないのですが、授業に出席した人は、講義記録を試験の時に見て解答を書けるということになっています。カラーコピーされたらどうしようもないことになりますが、こういうものを作らせています。

これの効用です。これは3年生の「物質循環化学」という科目の教室の風景ですが、休憩時間はみんなのんびりしています。15時10分から授業が始まりますので、15時10分にパワーポイントのこの文章を提示するわけです。そうするとすぐに学生は書き写し始めます。だいたい15時16分までということになっています。この量は6分間で書く量だと私が考えました。こういう指示を出しますので、学生はそれを必死で書き写すようになります。こういう意味でのんびり度の高い休憩時間から、割とすぐに集中モードにと。これを5～6分間で書き終わっ

たら、私がパワーポイントを使った話を始めます。

こちらののんびり度の変化です。休憩時間は非常にのんびり度が高いわけです。授業が始まり、書き写しが始まるとどんどん集中してきますので、のんびり度が下がります。少し先が見えてくると、あと1、2行になるとだらけるのですが、このへんまで戻るわけではないのです。

そういう意味で一旦、集中モードになるのもその後も集中が持続すると考えています。おそらく書き写しなしで、始業時刻からパワーポイントを見せて今日の分析化学はこうだあだという話を始めれば、集中度はガラガラ、のんびり度は落ちてきて、集中度は少しずつ増えていくと考えています。

## 書き写しの効用

この書き写しの効用を今後学生の立場に立つと、素早く書き写すことが必要な場面があると私は考えています。特に就活とか教育実習の反省会、必死でメモをとらなければならないのです。もちろん勤めてからは、いろんな商談とかいろいろな機会にメモを素早く取る必要がありますので、書き写す練習をさせています。

この部分を学生に見せて説明して、教員は「君たちをいじめるためにやっているのではない。すべて育てるためにやっている」と言っています。

授業が14、15回終わったあとで学生に感想文を書かせていますが、このようなものがあります。といっても数は2、3個ですが、「講義記録を素早く書かせるのも、将来的に必ず必要となるので良い練習となった」という前向きな発言です。

それから「授業の最初にパワーポイントを写させることで、休み時間からの気持ちの切り替えを促す考えは秀逸だと思った。もう、脱帽です」という感想文もあります。

私の講義の時間配分は、最初の5、6分が書き写しです。それから、パワーポイント資料に

基づくプレゼンがあります。その後、途中でビデオの放送が30分ほどあって、感想文を書きます。そしてまた、パワーポイントに移って、最後が5、6分の書き写しです。このように目先を変えることによって、飽きない、おそらくこのビデオ放送がなくて、1時間10分から20分をパワーポイントで喋ったら、必ず飽きるし、聞く気もなくなるし、おそらく寝ている学生も出ると思いますが、このように目先を次々変えるということです。ビデオ放送がない分析化学などは演習問題を入れることになります。

## 成績評価

この講義記録というのには点数がつきます。前半の7回が3点。後半の7回が4点。これは偶然こうなっているわけで、とにかく49点にするのが目的です。全部出たら49点になるようにセットします。レポート点、5点。英文和訳点、5点です。こちらを全部足すと59点になるように設定しています。

ということは、試験を受けなければいけない。試験場に来なければ、合格はしないのです。試験場に来さえすれば、知っていることを何でも書いて一点でも多く取ろうと努力しますので、試験に臨むようにさせるというのが目的です。試験は、合計点最高点が41点になりますので、これで適宜点数を付けます。完全に出席していれば、もう59点取っていますし、試験はどんなことがあっても20点とりますから、成績は結構よくなります。いろんな授業の出席点と同じなのですが、出席カードではなくて、講義記録というかたちにしてあります。出席点を出すというのは文科省で禁じられていますが、講義記録点であれば、私はそれは許されると思っています。

## ビデオ放送

次にビデオ放送です。ビデオだけとは限りません。ネットからも拾ってきます。このページも学生にビデオがある時に見せます。「150字

以上感想文を書いてください。放送の内容を拾って見ていたことがわかるような感想文を書いてください」という指示をしています。たとえば、酸性雨のビデオを見せた時に、「酸性雨の現状が大変なことがわかった。今後、国際的に協力して、みんなで解決していかなければならないと思った」というのは、どんなビデオでも書けるのです。そのようなものではダメで、そのビデオの中に出てきたその場面はこうだとか、ビデオの内容をちゃんと拾うような感想文を書くように指示します。

ここに示したのは、「何故プラスチックに電気が通ったか」というポリアセチレンというものです。白川先生というノーベル賞受賞者のサイトですが、これを見て、これに対して150字以上の感想文を書くというようになります。

## 演習問題

分析化学においては、ビデオがないので適宜演習問題を入れています。毎回とは限りません。こちらは分析化学のある演習問題です。このページを学生に示させて、まず学生は問題を写して解き始めさせます。こちらに書きましたように、分析化学とか物質循環化学によっては、演習問題は理解を深めるということです。

演習問題を学生に10分～15分間考えさせて、ランダムに当てます。前に来るように言って、学生に今の問題をこのように解かせます。ただ、一人で1題解くわけではなくて、途中を二つとか三つに区切って、学生を次々呼び出して解かせます。そしてこれはテストではありませんので、正解になるように適宜ヒントを与えたり、「次にこういう式を書けばいいのではないか」と言ったりして、正解になるように導いています。前へ出てきて、その学生をテストするというのではなくて、学生に授業に参加してもらうというニュアンスのやり方になっています。

あとでこのように、パワーポイントで解答が出てきますので、できなかった学生はこれを写せばいいのです。もちろん、できる学生もいま

すし、黒板で大体は解いていますので、写すにしても最低限になっています。

## 配布資料と音読

環境の問題など、新聞記事にすごい最先端のことが書いてありますので配布資料というものを作って配ります。配布資料は配っただけでは絶対に読まれないと思っています。「持って帰って読んでおいてね」と言っても誰も読みません。本棚かデスクの肥やしになり、最後、卒業する時に捨てられる運命にあります。だから、授業時間内に学生に当てて立って読ませるということをします。この時も、当てるのはランダムですが、時には「一番後ろに座っている人」というふうに当てます。私の授業では、後ろの席に座っているのは絶対にできない学生だという信念がありますので、後ろの席を当てたりします。

時々、音読がうまくない学生がいます。つかえる学生がいます。みんなその日にもらった資料ですから条件は同じなのですが、もらったのを初見でスッと読む人もいるし、つかえる人がいます。つかえる人は就活するときの面接を考えれば、もっと口がよく動くようにトレーニングした方がいいと思いますので、そういうことを自分で気付くような機会を設けるという意味でも音読は必要であると思います。また、音読をすると配付資料に最低一回は目を通すことになります。

## ノーベル賞関連の話

ノーベル賞関連の話というのは、分野によっては結構あります。私の教えている中では、分析化学、触媒化学、こちらにはノーベル賞受賞したような業績がいくつでも教える項目になります。

その中でも特に日本人受賞者の業績は身近で、学生はよく聞くとお思いますので、詳しく話しています。白川先生のポリアセチレン、こちら触媒です。しかも触媒の入れる量を千倍間違えて上手く行ったという話がありますので、学

生には非常に説明しやすいのです。野依先生の不斉合成です。こちら触媒です。鈴木先生、根岸先生のカップリング反応、これも触媒です。こういうのは全部触媒化学なのですが、日本人がノーベル賞という業績を得るようなすごい分野であるということになりますので、積極的に話をしています。

こちらがポリアセチレンの時の講義の一枚のパワーポイントです。タッチパネルや、写真フィルムやコンピュータスクリーンにポリアセチレンが使われています。この透明性、接着性、弾力性を活かしたタッチパネルの表面。静電気を帯びない写真フィルム、電磁波を防ぐコンピュータ用スクリーンなどに使用されています。非常に身近にポリアセチレンは使用されていますし、日本人がノーベル賞を取っていますし、触媒化学としても面白い内容を含んでいますので、非常に詳しくこのことは喋っています。

## 授業に望む姿勢

学生にこのパワーポイントを見せて時々、激を入れています。授業を聞くときには、「話している教員の顔かパワーポイント画面を見ること」、「教員の話を一言逃さずに聞くこと」、「下を向いたり、隣の人と“おしゃべり”するのは教員に対して失礼」、「教員の立場としては、携帯やiphoneを見ている学生は部屋からたたき出したい」ということを示して、「ちゃんと授業を聞くように」ということを指示しています。

2、3映像をみたいと思います。

(ビデオ上映)

これは、酸性雨のビデオですが、こういうのを見たときに、先ほど言ったような「酸性雨の現状のひどいことがわかった」というのではなくて、今の石灰散布のところが結構出てきましたので、そういうのを拾って書いて欲しいのです。こういうビデオを見せて感想文を求めています。

こういうのに、気候変動から生態系、漁業までとか、金の都市鉱山とか、いろんなサンプル映像があるのですが、このシステムでは出てこないで、表題だけです。サイエンスチャンネルのアースプロジェクトというものに、環境の太陽エネルギーとカリサイクル、ゼロ・エミッションなどがあります。周期表というのに、たとえば窒素、二酸化炭素、硫黄、水銀、そういう化学の基本となるものがありますので、そういうものも見せる項目にしています。これがサイエンスチャンネルです。「偉人たちの夢」には、メンデレーエフとか、レイチェル・カーソンとか出てきますので、こういうのも使えます。ネット映像ですが、赤潮を潜るとか、火力発電、脱レアメタルとか、丹念に探せばネットにもいろいろ面白い番組があります。特に私の授業は環境や触媒などですので、こういうものがたくさんあります。

これは白川先生のポリアセチレンのビデオです。このような白川先生のポリアセチレンのサイトがありまして、こちらにムービーがあります。これは音声はないのですが、ポリアセチレンの説明をしたものです。これも全編見せて、感想文を書くように求めています。もう少しくと、電子が動く漫画チックな絵とかいろいろ出てくるので面白いのです。

私の話というのは、理科系で先ほどの大人数とは違って、100人前後という教室ですから、比較的授業はやりやすいと思っています。そういう例ですので、他学部の方には参考にならない点が多いと思いますが、理科系としてはこのような人数でやることになるかと思うので、何か参考になれば幸いです。どうもご清聴ありがとうございました。

## 司会

村野先生ありがとうございました。今、ご謙遜されましたが、いろいろな学部、キャンパスの先生で、たとえば集中モードの作り方、書き写しの効用、それから、ご自身おっしゃってい

ましたが講義記録点。この導入等は参考になると思います。また、演習問題等分けて、正解になるまで導入するような授業の工夫、それからこれは文系の学部でも、いろいろな先生が行っていますが、音読の重要性、等々お話をいただきました。どうもありがとうございました。

では、最後の話題提供4の方に移りたいと思います。「現在の法政大学生に関する数値データについて―留級者数、退学・除籍者数にみる特徴を中心として―」と題しまして、法政大学学務部教学企画課学務企画担当の伊藤学さんをお願いしたいと思います。伊藤学さんは、FD推進センターのプロジェクトメンバーでもいらっしゃいます。では、よろしく願いいたします。

#### 話題提供

#### 「現在の法政大学生に関する数値データについて ―留級者数、退学・除籍者数 にみる特徴を中心として―」

伊藤 学

(法政大学 学務部教学企画課)

一部内部資料を含む為、掲載省略。

#### 閉会の挨拶

児美川 孝一郎

(法政大学 教育開発支援機構FD推進センター長・  
キャリアデザイン学部教授)

FD推進センター長をしています、児美川です。まずは、本日は長時間にわたりまして、皆様お疲れ様でした。そして話題提供してくださいました三人の先生方、鈴木先生、廣川先生、村野先生、そして学務部の伊藤さん、どうもありがとうございました。お世話になりました。忘れてはいけません、本日のファシリテーター、川上先生、お疲れ様でした。ありがとうございます。

私も聞いていまして、それぞれ持ち味が違う

感じですが、しかしどこに狙いを定めて、そういうことをされているのか、すごく参考になるところがあって、自分の授業を考えると非常に役立つと思いました。

われわれ教員は、ここにいる先生方もそれぞれ専門分野が全然違うわけです。けれども、授業という観点で見ると、「ああ、そうか。このやり方だったら、真似できる」とか、「これだったら、自分のところでも生かせるな」と、そんなことがわかって、非常に充実した場になったのではないかと思います。

FDは2008年ですか、義務化されて以降、いろいろな大学でやっているのですが、話を聞いていると二つぐらいのタイプがありそうだと思います。一つは、専門家をたくさん呼んできて、いろんな研修を受けて、「授業としての工夫の標準のモデルはこれだ」というのを示して、みなさんがそこに近づいていくようにやるような、ある種の専門家モデルというか、標準化モデルのような、そういうFDの活動と、そうではなくて、教員同士の同僚関係、同僚性というのを大事にして、お互いが隣り合っている人の授業を聞きながら、自分も気づきを得て、そしてまた人にも返していくという、そういう同僚文化で進めていくような、そういうFDもある気がしています。法政大学という大学に、どちらが合うだろうかと考えると、どう考えても前者ではないので、後者の同僚文化の中で、お互いに気づき合ったり、アイデアを出し合いながら高めていく、そういうことかなと思います。今日のFDセミナーはまさに、そういう実際に授業をそれぞれ苦労されてやっている方々の話の中で、私たちも新たな気づきを得て、そして自分の授業にも生かしていく、そういう場にできたのかなと思ひまして、非常にうれしく思っています。

冒頭、浜村理事がおっしゃっていましたが、本学のFDのシステムでは、新任教員の方には、付加がかかっていまして、2回ほどオブレーションで研修を受けなければいけないというこ



とになっていて、大変申し訳ないかたちなのですが、晴れて、本日をもちまして2回おしまいですので、おめでとうございますと言いたところですが、しかし、これが終わったからと言って、FDもさようならというのは是非やめていただいて、せっかくこういう機会等を得て、「なるほどな、人の話を聞くのも悪くないな」等々のことを思っていた分を、今後にも是非活かしていただければと思います。

FD推進センターとしては、これからもいろんなシンボですとか、その他たくさん用意します。今後は、オブリゲーションではございませんが、是非積極的にご参加いただければありがたいと思います。

本日は、どうもご参加ありがとうございました。お疲れ様でした。